

論考二

高等学校国語教科書における『古事記』倭建命

大塚 千紗子

はじめに

『古事記』中巻の景行記には、倭建命による西征と東征の物語が記されている。倭建命は父である景行天皇の命を受けて西征を行う。熊曾建と出雲建を討伐して帰還すると、父から「東の方の十二の道の荒ぶる神とまつろはぬ人等とを言向け和し平げよ」と更に東征を命じられるのである。高等学校国語教科書において、『古事記』倭建命の物語が採択されている場合、ほとんどは東征の命を受けた後の物語を取り上げている。転戦の果てに郷里を想いながら死んでゆく倭建命の物語は、国語教科書としてどのような意義・役割を持つものであるか。本稿では、高等学校国語「古典B」の教科書における倭建命の教材を分析する。その方法として、現在使用されている平成二十五年度検定教科書の状況から検討し、古典教育において倭建命の物語を生徒に教授する必要性が、いかなるものであるのか考察したい。

一、「古典B」における『古事記』の採択状況

高等学校国語「古典B」の教科書では『古事記』のいくつかの場面が採択されているが、大半は倭建命を扱う。現行

の平成二十五年度検定教科書における『古事記』の採択状況及び、教材としての取り扱われ方については、既に鈴木雅裕による詳細な調査があるが、ここで今一度確認しておきたい。

以下、教科書を示す際には教科書の出版社名、書名とともに文部科学省の教科書番号を（ ）内に記載した。また【 】には各教科書内で使用される單元名を示している。

《平成二十五年度検定教科書》

〈大蛇退治〉

明治書院 「高等学校古典B」(古B 318) 【伝承】

文英堂 「新編古典」(古B 319) 【上代の文学】

〈海幸山幸〉

大修館書店 「古典B 古文編」(古B 310) 【物語】

〈倭建命〉

東京書籍 「新編古典B」(古B 301) 【伝承の世界】

「精選古典B 古文編」(古B 302) 【上代の文学】

三省堂 「精選古典B」(古B 306) 【伝承】

教育出版 「古典B 古文編」(古B 307) 【物語】

「新編古典B 言葉の世界へ」(古B 309) 【物語】

明治書院 「精選古典B 古文編」(古B 316) 【伝承】

筑摩書房 「古典B 古文編」(古B 320) 【伝承】

桐原書店 「探求古典B 古文編」(古B 325) 【歴史と伝説】

「古典B」(古B 327) 【歴史と伝説】

以上の計十二冊が、『古事記』を採択する教科書である。右では掲載する場面ごとに分類した。教科書の多くは『古事記』中巻、景行天皇条における倭建命の東征を掲載する。次いで、上巻の須佐之男命の大蛇退治と海幸山幸の神話を扱う。倭建命の掲載率が高い要因は、国定教科書や検定教科書を引き継いでいるためであることが想定できる。⁽³⁾

各教科書が位置づける単元名には、【伝承の世界】(古B 301)、【上代の文学】(古B 302)、【物語】(古B 307)、【歴史と伝説】(古B 320) など多岐に亘るが、「伝承」に含めるものが比較的多い。東京書籍は【伝承の世界】(古B 301) と、【上代の文学】(古B 302) とで単元名を変えている。また(古B 302)では、教材末に古語辞典を用いて本文内の語句を調べさせる設問がある。内容は「倭しうるはし」、「御病、いとにはかなり。」など傍線部の形容詞・形容動詞の活用を問うもので、他の古典文学作品の文法学習と関わらせるための意図があると考えられる。

次に、倭建命を取り上げる教科書に範囲を絞り、それぞれの掲載範囲を挙げる。東征の物語は長大なため、各教科書は適宜場面を省略しながら掲載している。省略された場面は本文内に説明を挿入したり、脚注で補ったりなどして、東征全体の流れを把握させるための工夫が行われている。以下、各教科書が掲載する範囲を示した(項目の名称は小学館新編日本古典文学全集に拠る)。

《掲載範囲》

東京書籍 「新編古典B」(古B 301)・「精選古典B 古文編」(古B 302)

〔倭建命の東征・野火の難・弟橘比売命・酒折宮・伊服岐の山の神・望郷の歌・八尋の白千鳥〕
三省堂「精選古典B」(古B 306)

〔倭建命の東征・野火の難・望郷の歌・八尋の白千鳥〕

教育出版「古典B 古文編」(古B 307)・「新編古典B 言葉の世界へ」(古B 309)

〔弟橘比売命・望郷の歌〕

明治書院「精選古典B 古文編」(古B 316)

〔伊服岐の山の神・尾津の一つ松・望郷の歌・八尋の白千鳥〕

筑摩書房「古典B 古文編」(古B 320)

〔倭建命の東征・野火の難・酒折宮・望郷の歌・八尋の白千鳥〕

桐原書店「探求古典B 古文編」(古B 325)・「古典B」(古B 327)

〔倭建命の東征・野火の難・望郷の歌〕

各教科書の掲載基準で一貫しているのは、尾張国造の祖美夜受比売との月立ち問答歌を掲載しない点である。しかし多くの教科書は、倭建命が死に際して歌う記三十三番歌「嬢子の 床の辺に 我が置きし 剣の大刀 その大刀はや」を掲載するため、美夜受比売と婚姻の約束があったこと、剣を美夜受比売の元に置いてきたこと、などの経緯を生徒に理解させる必要がある。従って、婚姻と剣の所在については説明文や脚注で補足説明をしている。

例えば東京書籍は、「野火の難」の場面に繋げるリード文で美夜受比売と婚姻の約束を交わしたことを、「そこから倭建命は尾張国に赴き、その地の豪族の娘、美夜受比売に出会い、帰路には結婚することを約して相模国に向かった。」

(古B 301)と簡略に示した後、「酒折宮」と「伊服岐の山の神」との間に、「倭建命は、平定の軍を更に信濃国に進め、その神をうち従えた後、尾張国へと戻ってきた。前の約束どおり、美夜受比売と結婚するためである。」(同上)と、倭建命の尾張への再来と、美夜受比売との婚姻を記す。こうした説明文の措置に関しては、掲載範囲や教材末の設問とも関わるため、各教科書の対応は様々である。あくまでも倭建命の東征と死が指導内容の中心であるため、弟橘比売命も含めて妻の存在は省略、ないし説明文によって補われる傾向にある。

次に参考として、平成二十九年度に改訂された検定教科書において、『古事記』が教材として採択されているものを挙げる。⁽⁴⁾

《平成二十九年度検定教科書》

〈黄泉つひら坂〉

教育出版 「精選古典B 古文編」(古B 336)【上代の文学】

「古典B」(古B 338)【上代の文学】

〈大蛇退治〉

明治書院 「新高等学校古典B」(古B 347)【伝承】

〈海幸山幸〉

大修館書店 「古典B 改訂版古文編」(古B 339)【物語】

〈倭建命〉

東京書籍 「新編古典B」(古B 329)【伝承の世界】

「精選古典B 新版」(古B 330)【上代の文学】

「精選古典B 古文編」(古B 331)【上代の文学】

三省堂 「精選古典B 「改訂版」」(古B 335)【伝承】

明治書院 「新精選古典B 古文編」(古B 345)【伝承】

筑摩書房 「古典B 古文編 改訂版」(古B 348)【伝承】

桐原書店 「新探求古典B 古文編」(古B 354)【歴史と伝説】

平成二十九年度に検定を受けた「古典B」の教科書で、『古事記』を採択するものは右の計十一冊である。平成二十五年度検定教科書と比較した時に、注目すべきは教育出版の改変である。それまで取り扱っていた倭建命から黄泉国神話へと変更している。黄泉国神話の教材化は初の試みであり、大きな改変といえる。このような教育出版の方向転換がある一方で、他の教科書は現状のまま倭建命を扱っている。東京書籍は平成二十五年度検定教科書(古B 301)、(古B 302)から【倭建命の東征・野火の難】を減らした【弟橘比売命・酒折宮・伊服岐の山の神・望郷の歌・八尋の白千鳥】の範囲を掲載する。他の教科書は平成二十五年度検定からの変更は無い。

以上、平成二十五年度検定教科書の採択状況と教材の内容について概観し、参考として平成二十九年度教科書を紹介した。

「古典B」において『古事記』が採択された場合、倭建命の物語が多くを占めているわけだが、どのような基準によって倭建命は採択されているのだろうか。ここからは視点を変えて、教科書が教材を採択する基準について検討したい。

二、教材の採択基準―「編修趣意書」を通して―

各教科書会社は、教育基本法の第二条「教育の目標」⁽⁵⁾に掲げられた第一号～第五号の各目標が達成され得る教材を選定し、学習指導要領に則して教科書を編集している。現在施行されている学習指導要領（平成二十一年告示）と、文部科学省HPに掲載された各教科書会社が公表する「教科書編修趣意書」（以下、「編修趣意書」）から、倭建命の教材がいかにして採択され、どのような観点の元で学習と指導が見込まれているのか確認したい。

まず、学習指導要領が掲げる「古典B」の学習目標を確認する。⁽⁶⁾

「古典B」

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによつて人生を豊かにする態度を育てる。

右で示されているように「古典B」の学習目標は二つある。一つは、適切に古典を読む能力を身につけさせること。もう一つは、多角的な視点を持たせて古典文学を読む態度を養うことである。この教科の目標について「高等学校学習指導要領解説」（以下、「指導要領解説」）では、後段の「ものの見方…」以下の目標によつて、「古典に親しむ態度、我が国の伝統と文化を尊重する態度を身に付けることができる」という解説を付している。このように「古典B」は、古典教育を通じて「我が国の伝統と文化」を生徒に尊重させるという教育目標が伺えるのである。この目標の元、教科内での指導事項「ア」「オ」が掲げられている。

「内容」

(1) 次の事項について指導する。

ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。

ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。

オ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。

各教科書会社は、右の事項に該当する古典文学作品を選んだ上で教材化する。まず平成二十五年度検定教科書の教育出版の「編修趣意書」から確認したい。⁽⁷⁾

教育出版「新編古典B 言葉の世界へ」(古B 309)を例とする。この(古B 309)は、編集の基本方針に「1. 古典を学ぶことにより、わが国の文化・伝統の中に身をおき、古典の価値を再発見する。2. 生涯にわたって古典に親しむ読書人を育成する。3. 主体的に古典学習に取り組み、生涯学習の基盤を培う。」という三点を掲げる。そして『古事記』を【物語】の単元に位置付けて『大鏡』、『増鏡』と合わせて構成している。単元の学習内容は学習指導要領の「内容」(1)「イ」・「ウ」・「エ」に該当すると「対照表」に記されている。教育出版「古典B 古文編」(古B 307)及び(古B 309)の掲載範囲は前節で示したように、弟橘比売命入水の場面と、死に際した望郷の歌にまつわる場面を載せる。東征に赴く発端となった兄殺害や、姨倭比売命、野火の難などは、梗概文で補いながら全体像を把握させる工夫をして

いる。倭建命の西征及び東征は、『古事記』内でも特に紙幅を費やして描かれており、流浪と死までの顛末を理解させる指導は学習指導要領の「イ」に則しているといえる。そして、教材末の設問である「学習の手引き」には

①この物語の中で、弟橘比売は、どのような役割を果たしているか。

②「倭は国のまほろば」と歌った倭建命の思いはどのようなものであったのか、考えてみよう。

という二つの問題が置かれている。倭建命の東征事業を遂行させるべく入水した弟橘比売命の役割を読み取らせることは物語の展開を正確に把握させるために必要であり、指導事項「イ」に該当する。また、弟橘比売命が自らの身を海に捧げた理由は「渡りの神」の怒りを静めるためである。上代における自然への畏怖と信仰について教えることは指導事項「ウ」および「エ」と関連することができるだろう。

次に、教育出版以外の「編修趣意書」を確認するが、平成二十五年度の「編修趣意書」で、指導事項との対応を確認できるのは教育出版のみである。教育出版以外は、平成二十五年度から二十九年度教科書にかけて教材内容に変更は無いため、他社の教科書については現在公開されている平成二十九年度検定教科書に対する「編集趣意書」の「対照表」を参照する。

平成二十九年度検定教科書で『古事記』を含む単元の指導事項との対応については以下の通りである。

①ア・イ・ウ・エ・オに該当…東京書籍（古B 329）、東京書籍（古B 330）、東京書籍（古B 331）

筑摩書房（古B 348）、桐原書店（古B 354）

②ア・イ・ウに該当…明治書院（古B 345）

③イ・オに該当…三省堂（古B 335）

右では、該当する事項ごとに教科書を分類した。東京書籍と筑摩書房は、教材が指導事項「ア」「イ」「オ」の全てを満たしているとは回答するが、他の教科書は事項の全てに対応しているわけではない。該当事項ごとに分類すると以下のようになる。

「ア」(東京書籍・明治書院・筑摩書房・桐原書店)

「イ」(東京書籍・三省堂・明治書院・筑摩書房・桐原書店)

「ウ」(東京書籍・明治書院・筑摩書房・桐原書店)

「エ」(東京書籍・筑摩書房・桐原書店)

「オ」(東京書籍・三省堂・筑摩書房)

僅かな差ではあるものの、指導事項「ア」「イ」「ウ」との関連が強い。特に「イ」は、全ての教科書会社が項目を満たしていると回答している。倭建命の教材は、「語句の意味、用法及び文の構造を理解」(指導事項ア)し、「内容を構成や展開に即して的確にとらえる」(指導項目イ)ことと、「人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」(指導項目ウ)ことができる教材であるということになる。「編修趣意書」の「対照表」は、各教科書会社が作成した教材内の設問内容とも密接に関わるのである。この点については節を改めて検討したい。

三、設問の内容

本節では教材末に掲載された設問について確認したい。教材の設問とは、これまでの学習内容の確認でありながら、

生徒の興味関心を方向づける働きを持つ。各教科書会社の設問を検討し、倭建命をどのように教えようとしているのか、そして「編修趣意書」の「対照表」がどのように設問へ活かされているのかを確認したい。

少々長くなるが、各教科書の設問を掲載した。「」内はその設問に付された名称である。また、設問中の「」「」内の数字は教科書の頁数・行数である。

《設問》

東京書籍「新編古典B」(古B 301)

「学習の手引き」

- ① 倭建命がたどった道筋を、一四四ページの地図で確認しながら読もう。
- ② 倭建命は、「筑波」までの前半部ではどのように描かれているか。それ以降の後半部と読み比べてまとめよう。

- ③ この物語を読んで、倭建命についてどのように感じたか、話し合おう。

東京書籍「精選古典B 古文編」(古B 302)

「学習の手引き」

- ① 倭建命がたどった道筋を確認し、その地での行動をまとめよう。
- ② 能煩野の地で歌われた四首の歌謡には、それぞれどのような心情が表れているか。
- ③ 次の点について話し合おう。
 - (1) 倭建命はどのような人物として描かれているか。

(2) 倭建命が白鳥となり、飛んでいったという伝承には、古代の人々のどのような心情が表れているか。

〔表現と語句〕

① 次の傍線部の語について、古語辞典を使って本文中での意味を確かめよう。また、現代ではどのように用いられているか、短文を作って考えよう。

(1) 平らげに遣はしつ。〔二二〇・9〕 (2) 倭しうるはし。〔二二三・14〕

(3) 御病、いとにはかなり。〔二二四・6〕

三省堂「精選古典B」(古B 306)

〔学習の手引き〕

倭建は、どのような人物として描かれているか、次の三点を手がかりにまとめてみよう。

・ 天皇の命令への対応

・ 相武国での行動

・ 能煩野の地で歌われた四首の歌謡

教育出版「古典B 古文編」(古B 307)・教育出版「新編古典B 言葉の世界へ」(古B 309)

〔学習の手引き〕

1 この物語の中で、弟橘比売命は、どのような役割を果たしているか。

2 「倭は国のまほろば」と歌った倭建命の思いはどのようなものであったのか、考えてみよう。

明治書院「精選古典B 古文編」(古B 316)

〔研究〕

- 1 「草薙剣」を置いてきたことや「言挙げ」したことは、倭建命にどのように影響したか、考えてみよう。
- 2 「倭は 国のまほろば」「命の 全けむ人は」の二つの歌謡には、倭建命のどのような心情が託されているか、それぞれ考えてみよう。

〔言葉の学習〕

- 1 次の傍線部の、主に上代に使われた語について、それぞれ意味を確認してみよう。

(1) ここに、詔らししく(二〇〇・10) (2) 崩りましき。(二〇二・10)

筑摩書房「古典B 古文編」(古B 320)

〔読解〕

1. 倭建命は、東国の征討に行かされる理由をどのようなことだと思っていたか、指摘しなさい。
2. この話の最後はどのような場面で終わっているか。また、それが倭建命のよんだ歌とどのように関係しているか、考えなさい。

〔表現〕

1. 本文中の次の部分から助動詞を抜き出して、文法的に説明しなさい。

▼かれ、欺かえぬと知らして、その姨倭比売命のたまひし囊の口を解きて見たまへば(二四〇・1)

桐原書店「探求古典B 古文編」(古B 325)・桐原書店「古典B」(古B 327)

〔読解〕

1

「大和は……」（二〇三・二）、「命の……」（二〇三・五）、「愛しけやし……」（二〇四・二）、「をとめ……」（二〇四・五）の歌から読み取れる倭建命の心情の推移をたどってみよう。

「表現」 2

本文中の歌謡について、表現上の特色を指摘してみよう。

設問傾向としては、倭建命の心情を歌や東国征討を任せられた点から想像させる、倭建命の人物像を考察させる、東征の道程を把握させる、といったように人物造型と東征物語を理解させることが中心といえる。

これは前節で確認した各教科書会社が公開する、「編修趣意書」の「学習指導要領」との「対照表」「イ」、「ウ」と合致する点である。「ア」に該当する設問として、東京書籍「精選古典B 古文編」（古B 302）は動詞・形容詞・形容動詞の活用を問ひ、筑摩書房「古典B 古文編」（古B 320）は、文章中から助動詞だけを抜き出させ、助動詞の接続と活用を確認させる問題である。これらは中古文法と関わらせるための意図があるのだろう。一方、明治書院「精選古典B 古文編」（古B 316）は、本文中に出てきた「詔らししく」と「崩りましき」の意味を確認させる内容である。出題文に「上代に使われた語」であることを加えていることで、言葉が時代ごとに異なる意味を持つということを生徒に気づかせることができるだろう。その点では、先の筑摩書房（古B 302）の助動詞を抜き出す問題文の中にも、上代特有の助動詞「え」（受身）、「し」（尊敬）が含まれており、同様の意図を持つと考えられる。このように、前節で確認した「対照表」の指導項目に「ア」を含める教科書は、設問内容に古文単語や文法事項を設けていることがわかる。そして「ア」を含まない教科書（三省堂・教育出版）は、物語の展開や状況、心情の把握に内容が終始しているという差異が見えてくる。だが、内容や心情の把握を問うものの中でも、東京書籍

「精選古典B 古文編」の「倭建命が白鳥となり、飛んでいったという伝承には、古代の人々のどのような心情が表れているか。」(古B 302) や、教育出版「古典B 古文編」の「弟橘比売命は、どのような役割を果たしているか。」(古B 307)、また明治書院「精選古典B 古文編」(古B 316) が、草那芸剣を美夜受比売の元に置いてきたことや、倭建命の「言挙げ」による影響を考えさせる設問は、他の倭建命の心情や状況を問う設問とは少々異なる。古代の人々の死生観や古代文学の知識に関わりながら、『古事記』の物語の特質を教示できる設問といえる。倭建命の東征は多くの歌が記されるため、歌の中の特徴的な言葉を通して、古代の日本人がどのような言葉で心を表現していたのかといった事柄を考えさせることもできるだろう。以上のように、「編修趣意書」の「対照表」と、各教科書の設問との関係を見てきた。次節より、設問に至る前の本文内容を検討してゆく。

四、教科書の本文と『古事記』の表記

前節では、教科書の「編修趣意書」と現行教科書から設問の傾向について確認した。指導項目「ア」「エ」は、教科書本文をいかに読むかといった問題とも関わる。以下、教育出版「新編古典B 言葉の世界へ」(古B 309)の一部を抜粋して掲載する。

教育出版「新編古典B 言葉の世界へ」(古B 309) 一二四頁～一二五頁

そこより入り出でまして、走水の海を渡りし時に、その渡りの神、波を起こし、船を巡らせば、進み渡るところと得ず。しかしして、その後、名は弟橘比売命、申ししく、「我、御子に代はりて、海の中に入らむ。御子は、遣はさえし政を遂げ、返り言申すべし。」と申しき。海に入らむとする時に、菅畳八重、皮畳八重、絶畳

八重をもつて波の上に敷きて、その上に下りましき。ここに、その荒波おのづからなきて、御船進むこと得たり。しかして、その後の歌ひて言はく、

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし 君はも
 故、七日の後に、その後の御櫛、海辺に寄りき。すなはち、その櫛を取り、御陵を作りて納めおきき。

教育出版（古B 309）は本文に、山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集』を使用しているが、新編全集本との差異については傍線を附した。比較対象として同じく本文に新編全集本を使用する東京書籍「新編古典B」（古B 301）も合わせて掲載する。

新編全集本

教育出版（古B 309）

東京書籍（古B 301）

- | | | |
|---------|---------|---------|
| ① 其より | そこより | そこより |
| ② 入り幸して | 入り出でまして | 入り出でまして |
| ③ 浪を興し | 波を起こし | 波を起こし |
| ④ 廻せば | 巡らせば | 廻らせば |
| ⑤ 爾くして | しかして | しかくして |
| ⑥ 白ししく | 申ししく | 白ししく |
| ⑦ 妾 | 我 | 吾 |
| ⑧ 易りて | 代はりて | 代はりて |
| ⑨ 覆奏すべし | 返り言申すべし | 覆奏すべし |

⑩ 暴浪 あらのなみ

荒波

荒波

⑪ 自ら伏ぎて おのづか
な

おのづからなぎて

おのづからなぎて

⑫ 爾くして しか

しかして

しかくして

⑬ 歌ひて曰はく い

歌ひて言はく

歌ひて言はく

⑭ 治め置きき をさ
お

納め置きき

治め置きき

新編全集本からの本文の変更点は、右の範囲だけでも十四箇所を挙げることができる。上代文学は言葉も表記も他の時代と比しても特殊であるため、教材として使用するために変更点が多くなるのは必然といえる。教育出版と比べ、東京書籍はある程度、新編全集本の訓読を採用しているものの③・⑦・⑧・⑩などの変更点もある（これに関しては平成二十九年度検定教科書「新編古典B」（古B 329）、「精選古典B 新版」（古B 330）、「精選古典B 古文編」（古B 331）も同様）。しかし、こうした変更点によって、『古事記』独自の表記や表現が損われているのではないだろうか。

例えば、②「入り幸して」（『古事記』本文は「入幸」と表記）は倭建命が焼津からさらに東方へと進む意であるが、各教科書は「入り出でまして」と改めている。しかし、この「幸」字は天皇の移動を示す際に使用されるのであり、倭建命に対して「幸」字を用いているのは、そこに特別な意図を込めているからである。

例えば、神倭伊波礼毘古命（神武天皇）が、東征事業の途中で熊野の村に辿りついたと示す文脈は「廻り幸して〔廻幸〕」と表記されている。他にも、神倭伊波礼毘古命の巡行については「幸行」とあるように、天皇の資格を有する神倭伊波礼毘古命が移動を示す表現には「幸」字が用いられている。倭建命における特殊な表記の用法は、妻の弟橘比売命を「其の后」と称することも同様であり、新編全集本が「后」は天皇に関してしか用いない。「幸」という、天皇専

用語などとともに、倭建命を天皇と同じ資格で待遇するものとして注目される⁹⁾と、指摘するように注意すべき表記なのである。弟橘比売命を失つてもなお、東征を続ける倭建命の行動は「其より入り幸し、悉く荒ぶる蝦夷等を言向け…」や、「其より幸行して、能煩野に到りし時に、国を思ひて、歌ひて曰はく、…」と、能煩野で死を迎えるまで「幸」字が一貫して使用されているのである。天皇へ即位せずに亡くなったにも関わらず、『古事記』は「天皇専用語」を以て倭建命の東征物語を叙しているのである。このような『古事記』の表記意識を、物語や倭建命の特徴と関わらせて教示することも一つの方法ではないだろうか。

また、⑨「覆奏」を教育出版は「返り言」と変更している。この「覆奏」は、天皇の命令に対する復命の意味を持つ。例えば、崇神天皇条において天皇の命によって大毘古命は高志国を、建沼河別命は東方十二道を平定するように任命される。後に彼らは「是を以て、各遣さえし国の政を和し平げて、覆奏しき。」と平定完了の「覆奏」をするのである。よって「返り言」と変更した場合、天皇から受けた任務の完了を報告するという意味合いが薄れてしまい、単なる返事のように捉えられかねない。さらに⑩「暴波」は、各教科書ともに「荒波」へ改めているが、「暴」と「荒」とでは波の動きに対する表現が異なる。教材の設問内容が物語展開の把握や登場人物の心情を問う傾向にあるのは、こうした上代文学特有の表記と訓読が絡むのであろう。東征の物語の全体像や、歌から伺える倭建命の人物造型や心情を把握させることが指導の目標であるのは設問からも看取されるため、内容読解が中心になるのは否めない。よって難解な表記は変更せざるを得ないのであろうが、それでは上代文学である『古事記』の特質を理解させ難くなってしまわないだろうか。学習指導要領では、教材内容の取り扱いについて「教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文種や形態、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。」と指示する。先に挙げ

た「幸」について言えば、即位せず亡くなった皇子を、天皇と同等の存在として描くための表記であり、倭建命の東征物語を支える特徴的な言葉といえる。「言語文化の変遷」を教示するためには、むやみに『古事記』の表記を変更せず、『古事記』内部における独特な表記を活かすことも必要ではないだろうか。

次に、本文を支える「脚注」から、教科書本文と教示内容の整合性を検討してみたい。そこで、倭建命が辿った東征の足取りにおいて問題となる「焼遣」に着目してゆく。

五、脚注の妥当性―「焼遣」―

「野火の難」において、倭建命は相武国の国造に欺かれるが、草那芸剣で危機を逃れる。その地で国造等を焼き滅ぼしたために「焼津」という地名の起源になったと語られる場面である。

以下、『日本書紀』の対応箇所と合わせて挙げる。

『古事記』中巻 景行天皇 野火の難 弟橘比売命

故爾くして、相武国に到りし時に、其の国造、詐りて白ししく、「此の野の中に大き沼有り。是の沼の中に住める神は、甚だ道速振る神ぞ」とまをしき。是に、其の神を看行さむとして、其の野に入り坐しき。爾くして、其の国造、火を其の野に著けき。(中略)是に、先づ其の御刀を以て草を刈り撥ひ、其の火打を以て火を打ち出して、向ひ火を著けて焼き退け、還り出でて、皆其の国造等を切り滅して、即ち火を著けて焼きき。故、今に焼遣と謂ふ。其より入り幸して、走水海を渡りし時に…(後略)

『日本書紀』卷第七 景行天皇 四十年

是の歳に、日本武尊、初めて駿河に至りたまふ。其の処の賊、陽り従ひて、欺きて曰く、「是の野に、麋鹿甚だ多し。気は朝霧の如く、足は茂林の如し。臨して狩りたまへ」といふ。日本武尊、其の言を信じたまひ、野中に入りて覓獣したまふ。賊、王を殺さむといふ情有りて、王とは日本武尊を謂ふ。火を放けて其の野を焼く。王欺かえぬと知ろしめして、則ち燧を以て火を出し、向焼けて免るること得たまふ。一に云はく、王の佩かせる劍藜雲、自づからに抽けて、

王の傍の草を薙ぎ攘ふ。是に因りて免るること得たまふ。故、其の劍を号けて草薙と曰ふといふ。藜雲、此には茂羅玖毛と云ふ。王曰はく、

「殆に欺かえぬ」とのたまふ。則ち悉に其の賊衆を焚きて滅したまふ。故、其の処を号けて焼津と曰ふ。亦相模に進して、上総に往かむと欲ひ、海を望みて高言して曰はく「是小海のみ。立跳にも渡りつべし」とのたまふ。⁽¹⁰⁾

『古事記』の話の舞台は「相武」（相模）だが、『日本書紀』では駿河と伝えられている。『古事記』の物語内で静岡県駿河市と解釈してしまうと辻褄が合わないため、弟橘比売命の入水または野火の難を掲載する教科書は、必然的に「焼遺」の場所について言及することになる。前節で掲載した教育出版「新編古典B」（古B 309）の脚注は、焼遺の地名を受けた、傍線部「其より」について「相模の国の『焼遺』をさす。『焼遺』は、神奈川県厚木市近辺か。静岡県焼遺市ともいう。」との説明を付す。この点、他の教科書が「焼遺」についてどのように説明しているのか脚注部分を参照する。

東京書籍「新編古典B」（古B 301）・「精選古典B 古文編」（古B 302）

今の神奈川県厚木市小野の地という。一説に、今の静岡県焼津市とも。

三省堂「精選古典B」（古B 306）

地名。所在未詳。

筑摩書房「古典B 古文編」(古B 320)

現在の静岡県焼津市か。先の「相模の国」という叙述と矛盾するので、神奈川県厚木市西部とする説もある。

桐原書店「探求古典B 古文編」(古B 325)・「古典B」(古B 327)

今の静岡県焼津市のことか。相模の国の某所とする説もある。

東京書籍の脚注は、神奈川県であると述べた上で、静岡県の「焼津」に触れる。筑摩書房は、地理の矛盾点を指摘して、神奈川県厚木市西部と加える。これとは反対に、筑摩書房と桐原書店は先に静岡県であるとす。三省堂に至っては、所説に触れず地名であるとだけ述べている。このように、各教科書は物語内の矛盾を指摘してはいるものの、『日本書紀』と伝承に差異のあることを述べていないのである。

「焼遺」の場所について、本居宣長の説を挙げる。

本居宣長『古事記傳』二十七之卷

此は国の違へるには非ず、たゞ古と後と、名の変れるのみにして、実は一なり、上代には駿河国と云大名は無くして、【駿河と云はもと一郷の名にして、駿河郡の駿河郷是なり、然るをや、後に其郷名を取て、郡名とし、国の大名にもせるなり、】其国の地までをかけて、大名をば相武と云て、【此事下にも云べし】此倭建命の時も、いまだ駿河と云ふ大名は無かりけむ、⁽¹⁾

宣長は、かつての相模国の範囲は駿河までをも含んでいたから「焼遺」は駿河であると述べるものの、やはり不審が残るため、近年の注釈書は決定的な見解を出してはいない。

山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集 古事記』

ヤキツの地名の起源とみられるが、静岡県焼津市にあたるとみるには地理的に不審が残る。焼津なら駿河で、相模を舞台とするというのと合わない。相模国が古くは駿河まで含んでいたともいわれるが、疑わしく、相模の地名と考えるべきか。「焼遺」をヤキツと読むことにも疑問が残る⁽¹²⁾。

沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉校注『新校 古事記』

修訂は「遺」にウツ(棄)の意があるとして「焼遺」でヤキツと訓む。いずれも地名ヤキツ(ツ)(現静岡県焼津市)を表したものと解しての訓であるが、倭建命が難に遭ったのは相武国(相模国)で、ヤキツ(ツ)の地名起源が語られる場としては相応しくない。『古事記』に地名起源譚が頻出することは確かだが、事物の起源もしばしば語られている(上468「此還矢之本也」など)。当該部分は「草那藝剣」の名のとおり、身の草を剣でなぎ払って野火の及ばない安全な場所を確保する野焼きの方法・習俗の起源を述べたものと見られるので、「焼遺」はヤキノコシと訓む⁽¹³⁾。

『新校 古事記』は従来の「ヤキツ」の訓を改めることを目的とした上での解釈であり、草那藝剣の事物起源譚として捉える。现阶段の研究水準において当該の地理比定は困難といえるものの、『古事記』と『日本書紀』とで伝承に差異のあることは説明すべきであろう⁽¹⁴⁾。伝承地に差異が生じている一因として、『古事記』の弟橘比売命の歌が「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし 君はも」と「相模」の地を歌う点がある。『日本書紀』には記されない歌によって『古事記』の物語が規定されているのである。野火の難、草那藝剣の由来についても『古事記』だけでなく『日本書紀』の記述を比較することで、豊かな物語伝承の世界を示す材料になると考えられる。教

科書の多くは倭建命の東征の経路図を掲載しているが、『古事記』だけでなく他文献の伝承を含めて伝えることで、上代文学としての教材の特質が浮かび上がるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、古代の文学である『古事記』が古典教育に資するために、いかなる内容を教示する必要があるのか、こうした観点の元、現行教科書の調査と分析を行った。教材内の設問は、戦いの果てに客死した悲劇の英雄としての倭建命像を把握させることが中心であるから、各教科書は倭建命が東征の命を受けた後を掲載する。教材では父から疎まれた倭建命の嘆きと悲哀、そして流浪と死に焦点が当てられるのだが、その物語の発端、即ち父天皇との確執の原因は、倭建命の兄殺害にあったのである。〈血生臭い〉ともいえる場面ではあるが、こうした物語の鍵ともなる部分を示さずに、現代の視点で理解しやすい英雄像ばかりを伝えることは、『古事記』の物語を単純化してしまうことになるのではないだろうか。古代的な英雄像や神話的な物語展開など、古代の文学が持つ特質を踏まえることで、より豊かな物語性を伝えられる古典教材となる可能性を『古事記』は持っているはずである。

註

- (1) 『古事記』の引用は山口佳紀・神野志隆光校注『古事記』（新編日本古典文学全集1、一九九七年六月）に拠る。

- (2) 鈴木雅裕「『古事記』倭建命―読み換えられる『悲劇の英雄』」(梶川信行編『おかしいぞ! 国語教科書 古すぎる万葉集の読み方』笠間書院、二〇一六年十一月)。本稿を為すにあたって鈴木氏から調査方法や資料を教示いただいた。感謝申し上げる。
- (3) 三浦佑之「国定教科書と神話」(三浦佑之編『古事記を読む』吉川弘文館、二〇〇八年六月)。
- (4) 平成二十九年検定教科書については、国立教育政策研究所教育図書館において調査を行った。
- (5) 「教育の目標」第二条「教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。」(法律第120号 平成18年12月22日施行)。引用は文部科学省ホームページによる (<http://www.mext.go.jp/>)。
- (6) 学習指導要領及び学習指導要領解説の引用は、文部科学省ホームページによる (<http://www.mext.go.jp/>)。
- (7) 各教科書の「編修趣意書」は文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp/>) に掲載された各教科書会社が公表する資料を引用した。
- (8) 平成二十九年検定教科書が教科書本文に使用する『古事記』のテキストは以下の通りである。①新編全集【東京書籍「新編古典B」(古B 329)、東京書籍「精選古典B 新版」(古B 330)、「精選古典B 古文編」(古B 331)、三省堂「精選古典B 改訂版」(古B 335)、教育出版「古典B」(古B 338)、教育出版「精選古典B 古文編」(古B 336)、大修館書店「古典B改訂版 古文編」(古B 329)】②新潮日本古典集成【明治書院「新精選古典B 古文編」(古B 345)、明治書院「新高等学校古典B」(古B 347)、筑摩書房「古典B 古文編改訂版」(古B 348)】③日本古典文学大系【桐原書店「新探求古典B 古文編」(古B 354)】
- (9) 山口佳紀・神野志隆光校注『古事記』(新編日本古典文学全集1、一九九七年六月) 二二七頁頭注。
- (10) 小島憲之ほか校注『日本書紀』①(新編日本古典文学全集2、小学館、一九九四年四月)。
- (11) 大野晋編『本居宣長全集』第十一卷(筑摩書房、一九六九年三月) 二二九頁。
- (12) 註(1) 二二六頁頭注。
- (13) 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉校注『新校古事記』(おうふう、二〇一五年十一月) 二八七頁補注。

(14) 教科書によっては、草那芸劍についての脚注を「東征の途中に敵の火攻めに遭ったとき、この劍で草を切り払い難を逃れたことからこの名がついた」(明治書院「精選古典B 古文編」・古B 316)、「須佐之男命が八咫大蛇を退治した時に、その尾から得た劍。草を刈り払ったので、この名がついた。天叢雲劍とも。」(東京書籍「新編古典B」・古B 301)と付す。しかし、劍名の由来を説明しているのは「故、其の劍を号けて草薙と曰ふといふ。」という『日本書紀』の文脈であるため、脚注の説明は不十分といえる。

(15) 現行の教材内容は「学習指導要領」の指導事項「オ」を満たしているのだろうか。確かに、倭建命を教材として扱う場合は中国文化との関わりを見出し難しいのも事実である。教育出版がこれまでの教材から一変させて、平成二十九年度検定教科書「精選古典B 古文編」(古B 336)・「古典B」(古B 338)で「黄泉つひら坂」を扱ったのは注目すべき変更である。教材末では「古典の窓」というコラムを置いており、伊耶耶岐命が桃の実によって黄泉軍を退散させた記述について、日本における桃の信仰や中国の『荊楚歳時記』を引用して説明する。日本文学は中国の文化や文学の影響を受けて成立している背景や、そこから生まれた日本文学の特徴を知る上で有益な内容といえる。